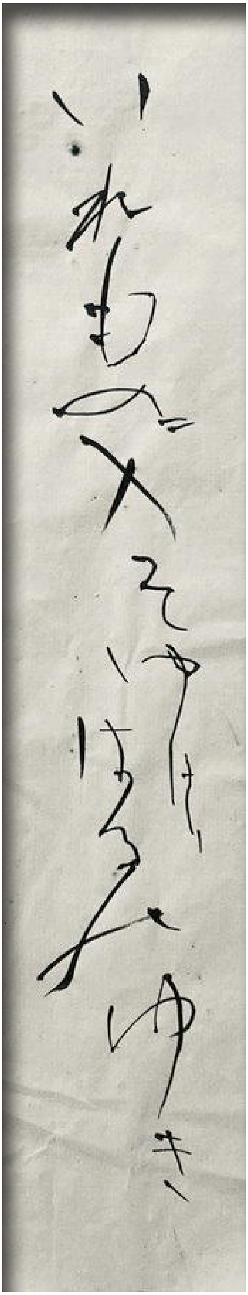
あそ 2

2026

撮影：不寝



春蚓秌蛇

容物に入つてゆけり春の雪　竹僊

二月集

坐・誹

佐藤　竹僊

落蟬のきのふと違ふところに居

音のない音を書き留め秋深し

約しくてむかごこぼしてしまひけり

物持ちていきものあゆむ秋の道

秋といふ一本の木が立つてゐる

銀葉のうへにあたりめのせてゐる

冬空を磨くをけふの爲すことに

階上の人の音するけさの冬

境内に電話ボックス冬燈

枯薄から手が伸びることはなし

第九の季節

秋川　泉

台所あふれる香り柚子を切る
用件は明日でいいよ冬の雨
木枯に逆らひ走る小学生
小春日のひとりのけんぱけんけんぱ
地震ありと木枯の夜に文をかく
ぼたん鍋異国の人のはしづかひ
指揮者の手師走の第九あふれ出る
指揮者の手しなやかに舞ふ「第九」冬
指揮者の手「第九」あふるる師走かな
歓喜ある合唱あふれ冬の月

年の暮

七郎衛門吉保

妹が逝き己が助かる年の暮
冬の雁ガンの治りてただいまと
柚子の風呂手術の痕を撫でにけり
凛として人寄せ付けぬ枯野原
冬の道一茶の日記帰郷せり
羽子板市熊のプーさん出番なく
白菜や陽の温み浴び重石待つ
クリスマスイブに少子化ニュースかな
米騒ぎ年の瀬一手のお米券
北風や舞ひ始めたりスパイ法

初句会

篠田純子

参賀者へ手を振る女王（にょわう）手話混へ

初神籤良縁有りと今さらに

夢はじめ心配かほの母出でぬ

あらたふとご祈祷受けし年の酒

初句会樽酒酌みて演歌など

水平線

篠田大佳

手紙書く春に大人となる君へ

冬麗を歩き煙草のをとめかな

居酒屋のサンタの背には羽がある

しんと鳴く風澄む闇に冬の月

幾度も君間違へよ冬の風

臆病な君と同じ雪を見たい

散逸の詩を落葉に彫る海辺

凩や海に名前を付けられぬ

友は冬水平線の中にゐる

アイスでしょ

須賀敏子

降る雪や北の大地に友二人
スマホ注文操作まだまだ外は雪
物事の朧に見えて外は雪
降る雪や今年も九条守りたい
窓越しの冬日背に夫筆を持つ
降る雪やお風呂の後はアイスでしょ
まあまあの一日でした寒満月

北勢線

長崎桂子

居座らず通過してゆく冬将軍

ストーブの点検たのむくもり空

テレビに天空の鳥居富士と雪

初雪や西風きびし降り頻る

ごみ捨て場みな黙りゐて手早くて

十二月かじかむ手足痛みゐて

暮の墓まゐりや冬もみぢ真っ赤

調査員厨きれいと言ふ暮に

藤原岳端然と見ゆ北勢線

年の暮枯野をはしる北勢線

師走

森なほ子

風も無く晴れて勤労感謝の日
紅葉森閑桜もみじのあつけらかん
一人なら蹴散らして行く銀杏黄葉
建築の音さまざまや冬青空
雲も無く今年の取りの冬満月
短日や西の山の端燠赤く
玉葱の不遇をかこつ節料理

年用意

赤座典子

ベランダの餌皿に蜜柑クリスマス
「お菓子をどうぞ」子供食堂のクリスマス
大皿を九枚洗ふクリスマス
枯枝にとどまる石榴重々し
問診のストレスに〇開戦日
ヒマラヤンのどーんと重し冬日差
図書館の隅に静謐賀状書く
床の間にチャグチャグ馬こ年用意

秋收集

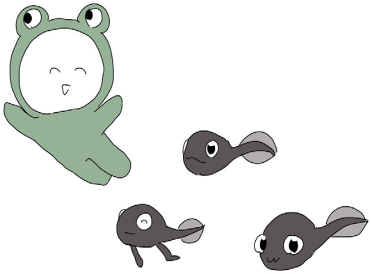
ひよつとこがおかめを圍むうららけし　佐藤 竹僊

相寄りて対の陶器や寒の鯉　赤座典子
太やかに天へ伸び行く時雨虹
尾の先のあちこちに向く掛大根
ハン・ガンの童話に接す一葉忌

朝顔の色濃き花の暮残る　秋川 泉
栗虫を食べて幼子よく笑ふ
秋時雨山寺でき く浪花節
秋の暮ざわめきの中「眠り猫」

タッチして扉開けたる熊の知恵　七郎衛門吉保
温暖化熊にも生きる辛さあり
へぎ蕎麦を打つ手休めて熊ばなし
熊さんよ我等そんなに旨くなし

冬場所に祖国の青の閃けり
歳晩や目の合ふをんな占師　篠田純子
土塁跡武蔵鐙の実の燈
色なき風鯊釣の人ふたり消ゆ



ごごはと絡まるホース十二月
金風や坂に迷ふはジュブナイル
紅葉狩パパとダディと二人の子
ＡＩの嘘を支へに末の秋

篠田大佳

この小道明日はなくなる冬の暮
年新た女性総理も恙無く
あの人はいつも三日目年賀状
富士に雪降下訓練してみたい

須賀敏子

久米アナの訃報ラジオで松の内
枯れ色の始まり岸辺にぎはしき
枯れ色の川辺に遊ぶ老と幼

長崎桂子

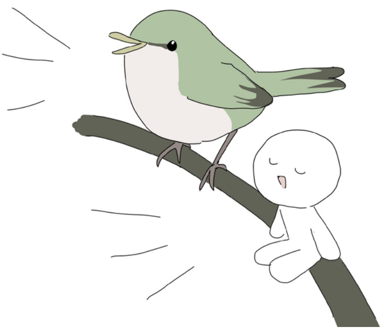
こんな日は綿虫の日と呟けり
飢えつつも人里に来ぬ熊あまた

追悼句　二句

一徹は偉人変人枯蟷螂
一徹の酒は剣菱燗いらぬ

森なほ子

喜孝抄



十二月号作品より

赤座典子・篠田大佳・佐藤喜孝

秋風をみてゐてきいてゐてゆふべ　佐藤竹僊

風を五感で感じるとしたら、体のどの部分で風を感じるのでしょうか。外を歩いていて風を受けていると、風の温度を感じます。風のにおいというのもあります。うっかり風の味を味わってむせることもあるでしょう。風の通り道にいると、視覚や聴覚以外の部分も駆使して、全身で風を感じているようです。

掲句では、視覚と聴覚に注目しています。落葉を動かす風、動いた物が鳴らす音や隙間風。どうやら、作者は室内にいて、風の通り道の外にいるようです。風の道の外から風を感じているうちに、あっという間に夕方になってしまった。作業に没頭していたのかもしれません。ぼんやり窓の外を眺めていたのかもしれません。時間の流れのゆっくりとして暖かい感じが伝わってきます。（大佳）

菊日和父に持たせる一里飴　佐藤竹僊

一里飴とは懐かしい響きですが、江戸時代に作られ、今も製造販売されているようです。一粒で、一里の距離を溶け切らずに味わえると旅のお供に携行されました。出かけるのに相応しい秋晴れ

に、「はい！」と差し出す「一里飴」。お父様への懐かしさと、思いやりが、伝わってきます。（典子）

秋夕焼明日在ることを疑はず　森なほ子

状況や気分によって、読み方が変わる句です。病中吟のようでもあり、社会批評のようでもあり、青春の一ページのようでもあります。明日があることの有り難さは、その日の過ごし方によって、変わっていきます。一日を無為に過ごしたかもしれない。充実した一日だったかもしれない。それでも、今日があることのありがたさは、どの人間においても普遍的なものです。今日一日を大事に生きてきたかという、作者からの問いかけのようにも聞こえます。（大佳）

更けゆけば満月小さし風の中　森なほ子

月は上るにつれてだんだん小さく見えるものらしい。周りに大きさを比較するものがあると大きく見えると知られた雑学である。この句の言ひたいことは「風の中」である。小さくなつた満月に、大げさにいへば孤独感、寂寥感を覚えたのだとおもふ。雲もない天上を独つ行く月はどの時代の人もなにがしかの感情を呼び起す。月は、月に国旗が立つ時代であつてもまだまだ文学的である。（竹僊）

撓なる柿照り映える並木道　赤座典子

並木道の光景です。一枚の絵画を眺める鑑賞者のように、近景からだんだんと遠景を描き出しています。脳裏に描かれた映像を言葉に起こしてみると、柿の実が良い形をして揺れています。夕日に当たっているのか、色艶も良さそうです。並木道も鬱蒼としているようで、日の光が差し込んできます。思いがけない角度の光が目に入り、少しよろめきながら、光景の美しさをその瞬間に記録しています。（大佳）

§

特異な景に思へる。柿の植ゑられた並木道。実の成つた時はまた花とは違ひ素晴らしい光景ではと想像する。その景を典子さんは目の当たりにされた。調べたら「天平宝字三年（七五九年）東大寺の僧・普照の提案により、駅路の両側に果樹（柿など）を植える政策が始まったとされています。」と。古代におもひを馳せこの句の道を歩きたいものだといふ夢を見ました。（竹僊）

芙蓉咲く大音量の寡婦の家　　秋川　泉

「寡婦の家」と作者が認識している家から、思いもかけない大音量が。どのような種類の音とか、容量とかには一切触れられていません。泉さんならではの、インパクトのある作句に惹かれて、取り上げさせてもらいました。その家の状況も併せて、詳細を伺いたいものです。（典子）

つねよりもまんまん丸に月育つ　　秋川　泉

月には月齢がある。十五夜より翌日の方が大きいこともあるらしい。「まんまん丸」は童画のやうな心もちにさせるおほらかな表現である。常に月に心をよせてをられる人の作品である。(竹僊)

秋の畔残る小花の我が身かな　　七郎衛門吉保

長々と続く畔には、雑草に交じって、摘まめるほどの小さな花が残っています。今年に入って、様々な事に遭遇した作者は、その花に我が身を重ねています。あまりにも想定外の状況でしたので、日頃の作者らしくない句が生まれました。(典子)

稲刈りの一息つきて薄荷糖　　七郎衛門吉保

労働を詠んだ句に久しぶりに会つた気がする。この句の稲刈りは機械作業ではないとおもふ。作者の親しい人の農作業であらう。そのあたりを「薄荷糖」が報せてくれる。吉保さんも少しはお手伝いされたのかもしれない。薄荷糖は新潟県魚沼地方の伝統的和菓子。吉保さんの第二の故郷なのかもと思つた。薄荷糖がいい味をだしてゐる。(竹僊)

ゆく秋や「おたま」佇む無縁坂　　篠田純子

森鷗外作の「雁」は、無縁坂沿いの家に囲われている、お玉さんの物語です。作者は、はかない結末を、ゆく秋として句にされています。選ぶことの出来なかった生き方を、「佇む」という

言葉に集約されています。無縁坂も寂しい響きですね。（典子）

ＡＩに騙されたかも文化の日　篠田純子

社会がＡＩに騙されてゐると大きく読むこともできる。さう読んでもよいのだが、ここでは個人的経験と読んだ。何かを尋ねたか相談した。その答えがあまりに全うなので首肯してしまったが、時が経ち落ち着いてかんがへた。半信半疑の「かも」と「文化の日」との掛合がわたしにはおもしろかつた。お洒落な文明批判の句。（竹僊）

秋しぐれ非可聴音に満ちし街　篠田大佳

可聴音とは馴染みがない言葉でしたが、人間が感知できる音ということで、それを表す周波数の幅以外が「非可聴音」でした。人の耳に聞こえないほど高い音を「超音波」低い音を「超低周波音」というそうです。

等々、教科書からの抜粋のように書いてしまいましたが、作者としては、秋しぐれの中の、日常とは違う空気に、不思議な音に包まれていると感じられたのかもしれません。（典子）

§

典子さんが書かれてゐるやうに知らぬうちに非可聴音や無数の電波に囲まれてゐる。もしこれらが目に見えたらと、ときどき恐ろしくなる。非可聴音は老人には無縁。私は八〇〇〇サイクル

あたりから上は非可聴音である。それでもハイレゾだと謳われてゐるヘッドフォンで音楽を聞いてゐる。耳鳴りの幕の中から聞き分けるといふことになる。非可聴音にはリラックス・ストレス低減・免疫力アップに効果を期待されてゐるらしい。非可聴音を通信や屋内測位システムなどに使用されてゐるとのこと。まさに「満ちし街」である。秋しぐれにも可聴音が含まれてゐるのだらう。（竹僊）

秋深し村の外れに父母の墓　　須賀敏子

晩秋の頃、まだ寒いというほどではないけれど、少し着るものが増えてきた。故郷を訪ね、村を一回りしていく。懐かしさもあるが、昔のことを思い出す物も少しずつなくなっている。最後に父母の墓に挨拶をしに行く。思い出すこともあるが、日も傾き、そろそろ離れなければならない。暖を求める体は人家を目指すが、この場を去るのも名残惜しい……。句を読んで、思い浮かんだ光景を述べてきましたが、過ぎ去った時間の懐かしさ、寂しさが晩秋の気分にしみわたります。（大佳）

秩父路や秋明菊の咲き揃ふ　　須賀敏子

「秩父路や」と明快な出だし。そして道沿ひには敏子さんの好きな秋明菊が咲きそろつてゐるといふ完璧な光景。あとは読者の想像を膨らませて最高の秩父路を描くことになる。秋明菊は句会

でも尋ねるほどの言葉だけで知る花。キンポウゲ科アネモネ属の多年草で、実は「菊」ではなく、アネモネの仲間とか。確かに菊とは少し違ふ容姿をしてゐる花であつた。京都の貴船や嵯峨野などで自然化したことから「貴船菊」とも。一度現物を見たいものです。（竹僊）

名月の輝きの時うつろにて　　長崎桂子

名月の頃、俳人たちは月を眺めて、名月を詠みますが、作者は、朝型の生活を送っているのか、少し眠くなってきて、月がぼんやり見えているようです。名月を味わいたいけれども、体がなかなか集中させてくれない。光景の隅っこのもどかしさを読みます。（大佳）

敷石をはき水を撒くやっと秋　　長崎桂子

門から玄関までの敷石に水を打ちながら秋のおとづれを知る。桂子さんの詠み方がおもしろい。「敷石に水を撒き」で済むところだが納得出来ないのである。敷石を掃き清めてそして水を撒くと丁寧に云ふ。この重ね方が「やっと」につながってくる。「電車こむ街も混雑祝祭日」も電車か街の混雑さを詠めば済みさうだが、さうはいかぬのが桂子さん流。この句おもしろく書きたかった。「祝祭日」をほかの季語に直してとも思つたが思ひとどまつた。（竹僊）

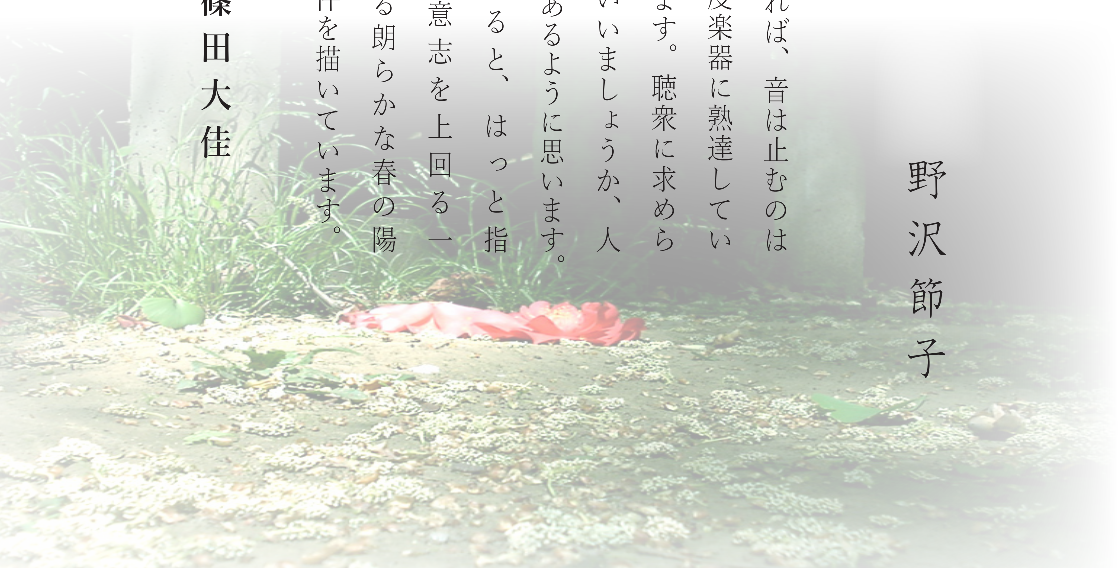
春昼の指とどまれば琴も止む

野沢節子

昭和二十四年の作。これまでの鑑賞では、「指を止めれば、音は止むのは当たり前」という視点が語られます。しかし、ある程度楽器に熟達していると、指を動かしている主体は人間でないように思います。聴衆に求められたり、音楽から次の手を導かれているような感覚といいましょうか、人間の意思で曲を弾いているというのは、大いなる誤解であるように思います。

音楽に支配されていた人間が、春昼を感じると、はっと指を止めてしまう。自然の意志が音楽的空間の意志を上回る一瞬。音が止まる空間の緊張感、それをも受け入れる朗らかな春の陽気。自然を讃えながら、空間の中に起こった小さな事件を描いています。

篠田大佳



季語あれこれ

今月は山・川・海からはじめやう。名詞に春夏秋冬のいずれかを付けると季語化するが落し穴もあるから注意が必要。

《春の山》

大勢の入りたるまま春の山　小島良子

作者は亀田虎童子さんのご夫人。格のある古俳諧のやう。

春の山海を見んとて登りくる　鎌倉喜久恵
剃髪に漆の頭襟春の山　篠田　純子
春の山都道南限より歩く　須賀　敏子
春の山登ると冬に戻りけり　須賀　敏子
紫に色変へゆきて春の山　大日向幸江
はなうたの軍歌に氣づき春の山　佐藤　竹僊
春の山ぐるぐる路がついてゐる　佐藤　竹僊
死水欲しき水湧く春の山　亀田虎童子
春の山不始末されて赤く燃ゆ　七郎衛門吉保

《春の川》

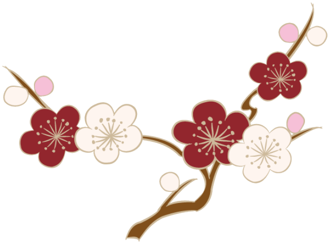
きれいな川汚い川も春の川　阿部　寒林

寒林さんのへそ曲がりぶりも懐かしい。

春近し川音少し華やぎて　鎌倉喜久恵
春疾風川面を蹴って突き抜ける　鎌倉喜久恵
魚野川春動き初む水の音　関口　ゆき
水切りの石探しをり春河原　鈴木多枝子
溺死累々親子のそれと春運河　堀内　一郎
避難所は川の向うや春ともし　堀内　一郎
春の川ふじつぼ付いたビール瓶　篠田　純子
春の川橋真中が県境　木村茂登子
流されて春の大川魚群れ　長崎　桂子
大川に春の潮満ち船遊び　木村茂登子
宇治川を小舟に揺られ春ふかし　田中　藤穂
春光や大川揺らす水上バス　遠藤　実
かさなりてはらから浮きし春運河　堀内　一郎

日輪を聚め立春の鶴見川　木村茂登子
翡翠は残影ばかり春の川　森　理和
春寒しシャベル沈めて川光る　早崎　泰江
石五つ飛んで渡つて春の川　森　理和
春の川たゆたうてゐる曲り角　木村茂登子
跳べるかとみてゐる春の小川かな　佐藤　竹僊
春愁河口静まり氣味わるき　長崎　桂子
河川敷浸しはじめし春の水　竹内　弘子
川上に小波立ちたる春の川　大日向幸江
塔右に左に春の隅田川　木村茂登子
田雲雀や空堀川に春の水　須賀　敏子
うぶすなの春の小川は音もせず　佐藤　竹僊
魚の影春の日ざしの柳瀬川　篠田　純子
春の河原五平餅売しづかなり　田中　藤穂
早春の築地川から隅田川　佐藤　竹僊
春の川遡りたる川鵜かな　大日向幸江
柿の葉鮨待つ縁台や春の川　田中　藤穂
ふるさとは遠しと来り春の川　森　なほ子

藪中で曲りし音の春の川　佐藤　竹僊
川上より流れてきたる春の水　佐藤　竹僊
名を知らぬ春の小川の水濁る　森　なほ子
春の町川をつたひてくる鴎　佐藤　竹僊
檻の中春の小川はさらさらと　佐藤　竹僊
「冷たくなーい?」「つめたくないよー!」春の川　篠田　純子
春立つや小川の水のかさ増して　長崎　桂子
只静か染めの川面に春時雨　須賀　敏子



《春の海》

よたよたと行く江の電や春の海　能村登四郎

江ノ電には春の海がよく似合ひますね。

春の海UFO停まる三原山　森　理和
浅春の海風たたく保安林　長崎　桂子
水槽の鮃は春の海を見ず　早崎　泰江
春の海ぼんやり眺む停車場　森　理和
探り合ひ空母艦隊春の海　森　理和
ゆつたりと白き船置く春の海　関口　ゆき
圓形の水平線や春の海　長崎　桂子
ぴたぴたと底すきとほる春の海　長崎　桂子
春の海進めば舳先泡立てり　長崎　桂子
舟と船つなぐ電信春の海　長崎　桂子
春の海裾を濡らして石器びと　佐藤　竹僊
青空のまま暮れかかる春の海　鎌倉喜久恵
春の海よりつぎつぎと波頭　吉成美代子
巻貝がごろんと倒れ春の海　佐藤　竹僊
煌めける川無き島の春の海　赤座　典子
精霊や陰と陽もつ春の海　森　理和
いろといふいろすべてもちさり春の海　森　理和
遊覧船初春の海ほぐれをり　長崎　桂子
洋館の小さき窓越し春の海　森　理和
黙祷のまなうらにありあり春の海　木村茂登子
あの日のことなかつたやうな春の海　木村茂登子
春の海亀重なりて悠然と　須賀　敏子
由布島まで牛曳き渡る春の海　吉成美代子
春の海大きくなりし鳶の輪　森　理和
朝の風呂ラジオのむかふ「春の海」　七郎衛門吉保
リアス線開通春の海輝く　田中　藤穂

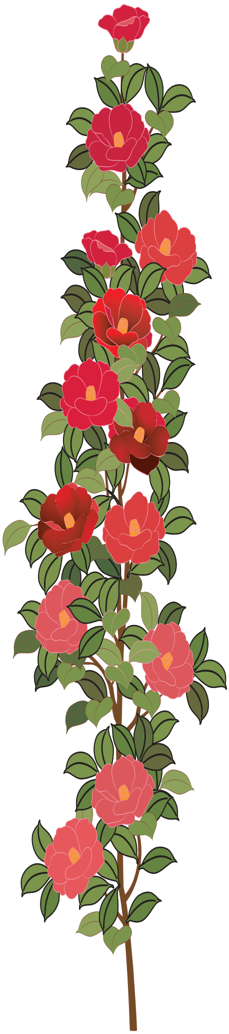
《蝶》

てふてふや絶海の孤島のごとく病む　矢内　朝子

癌にとりつかれ転々土地を変へ医療に努められた。ときに遠く四万十川のながれる地に転地された。

弥陀の肩すべりたる陽の蝶と化す　渡辺　友七
くさむらの日を逃れゆく雀蝶　渡辺　友七
坂くだり来て初蝶を見失ふ　後藤　志づ
蝶々や塀の向ふは迷路かも　芝宮須磨子
昼は蝶の越えし野川よ泣きに来る　渡邉　友七
初蝶や好みし花を探しをり　鈴木多枝子
川船へ蝶は言葉のやうに降る　渡邉　友七
古堀の化身の紋白蝶ふたつ　竹内　弘子
台風の去りて蝶々空高く　河合　笑子
弟の抽斗に充つ展翅の蝶　竹内　弘子
いつの間に黄蝶とよはひへだたりぬ　佐藤　竹僊
離れ離れに蝶々の翅うらおもて　佐藤　恭子
初蝶句碑すこしのぞけり人を待つ　堀内　一郎
百歳にまだ時間あり蝶の羽化　田中　藤穂

片羽根の欠けたる蝶の道に居る　鎌倉喜久恵
蜘蛛の囲に蝶かかりたり立ち竦む　早崎　泰江
蝶の屍とタリバンの兵重ねけり　渡邉　友七
雲雀野の朽ちし一橋蝶と往く　渡邉　友七
街なかに銃兵黄蝶弾みやまず　佐藤　竹僊
あちこちに鍵入れておく蝶々かな　堀内　一郎
初蝶や心細げに風うける　早崎　泰江
とぶ蝶の羽のうすくて苗田病む　渡邉　友七
蝶低し山羊が子を呼ぶ耳ふるふ　渡邉　友七
一蝶の何こころざし去りゆくや　渡邉　友七
もんしろてふ飛行船から撒いてゐる　佐藤　竹僊
初蝶にさゆらぐ心捉え得ず　渡邉　友七
初蝶や村里單線無人驛　長崎　桂子
紋黄蝶ひらひらよぎり死の知らせ　早崎　泰江



とぶ蝶を眼で追ひ乳房はなさぬ子　渡邉　友七
石仏の慈顔蝶よぶ眼をほそめ　渡邉　友七
白蝶の上を黄蝶のいそぎゆく　佐藤　竹僊
菱バッタ紋白蝶におどろきぬ　佐藤　竹僊
墓を出て紋白蝶になつてゐる　堀内　一郎
花に入る蝶は睫を大切に　佐藤　竹僊
初蝶にまだ会はぬなり空青し　山荘　慶子
菜の花に蝶現れて初初し　早崎　泰江
霧笛橋から残るみかんへ蝶渡る　篠田　純子
紋白蝶菜の花の黄を身の内に　鈴木多枝子
紋白蝶日だまりに飛ぶ力溜め　鈴木多枝子
初蝶が隠者のごとく脇通る　東　亜　未
いくたびも風乗換へる紋白蝶　赤座　典子
もんきてふ風に這松登山口　藤野　寿子
たゆとうて鯖色の海蝶わたる　鎌倉喜久恵
紋白蝶乳房を支ふ母の指　森　　理和
小雀の蝶になりきり降り来る　鈴木多枝子
痛む胸に蝶は言葉のごと降れり　渡邉　友七

四面道の渋滞を越ゆ紋白蝶　赤座　典子
しゃぼん玉蝶のかんばせ撫づるかな　佐藤　恭子
近道の行く手ゆくてにしじみ蝶　佐藤　恭子
踊の輪蝶々てふてふとはいり込む　佐藤　恭子
風にのる黄蝶の翅ののびやかな　佐藤　恭子
唐突に低く飛び行く黄蝶かな　須賀　敏子
ゆらゆらと黄蝶高みに余震かな　田中　藤穂
菜花畑乱舞のごとくもんしろ蝶　早崎　泰江
初蝶に指紋をつけし少年期　佐藤　竹僊
初蝶や赤信号を渡りきる　佐藤　恭子
きらきらと初蝶舞ふや洗車中　大日向幸江
足先へ見馴れぬ蝶々神隠し　森　　理和
欄を難無くわたる番蝶　佐藤　恭子
日のなかに翔びきて蜆蝶身をあます　佐藤　恭子
誰の老後も淋しさ募る蝶の昼　阿部　寒林
蝶の箱かさなり置けり唸り出す　佐藤　竹僊
初蝶や薄ら日に風みどりなり　長崎　桂子
台風一過歓喜のごとく蝶の飛ぶ　早崎　泰江

初蝶の危なっかしくも橋の上　大日向幸江
戰果とは蝶は低きをとびつづけ　佐藤　竹僊
蝶々は天空が好き番また　佐藤　恭子
蝶はバラ科そしてわたしは裏星科　佐藤　竹僊
鋳掛屋に道ながくあり春の蝶　佐藤　竹僊
草原は初蝶を添へ景となり　山荘　慶子
触れもうて草のいろいろてふてふかな　佐藤　恭子
自転車で竹富島に蝶の群　須賀　敏子
身をかすめわらひ上戸の紋黄蝶　佐藤　竹僊
しろたへの蝶なか空をきりきざむ　佐藤　竹僊
てふてふのおぼれてゐるよ蒼空に　佐藤　竹僊
初蝶の双つ蝶かな雛の日　井上　石動
白蝶のあんなに遠いところかな　佐藤　竹僊
強風に生まれし蝶の翅炎ゆる　竹内　弘子
初蝶や子等に負けじと川遊び　七郎衛門吉保
花びらの虚空に蝶の動きせり　森　なほ子
朝まだき紋白蝶のふはふはと　石森　理和
蜆蝶光のかげにみえかくれ　佐藤　竹僊

蝶々のいち日川の向ふがは　佐藤　竹僊
紋白蝶群れなし飛びぬ浄水場　大日向幸江
てふになり花になったり日の永し　佐藤　竹僊
永い旅始める覚悟蝶々に　大日向幸江
蝶々と同じ早さの散歩道　大日向幸江
ひらひらと初蝶鵯に追はれをり　田中　藤穂
巣ごもりて夢の中にも蝶の舞ふ　秋川　泉
土手は燦燦飛び交ふ紋白蝶　長崎　桂子
蝶捕の荷の嵩ばらず泉汲む　佐藤　竹僊
蝶捕の子供が入るほどの網　佐藤　竹僊
はつてふのやうにふるへて春のなゐ　佐藤　竹僊
酔客や胡蝶の夢の初句会　篠田　大佳

パンダ舎に居る気配なく紋白蝶　大日向幸江
コロナ終息せば何処へも蝶の夢　篠田　純子
風止めて雲間あちこち蜆蝶　長崎　桂子
初てふと蝶にこゑかく飛び去らず　佐藤　竹僊
白き蝶三頭もつれ離れずに　田中　藤穂
詰草にまた戻りくる小雨蝶　佐藤　竹僊
家捨てて蝶をあつめる病かな　亀田虎童子
この庭にしばし留まる胡蝶かな　須賀　敏子
風景をいつかはみ出るもつれ蝶　亀田虎童子
初めての写経終はりし蝶の昼　須賀　敏子
初蝶来上下左右に植込を　長崎　桂子
白と黄の初蝶や石燈籠めぐり　長崎　桂子
花よりも短きいのち書のてふ　佐藤　竹僊
雙蝶の落ちてゐるとは氣のつかず　亀田虎童子
瑠璃色の蝶たもとほる潦　篠田　純子
結末を蝶は知らざり産卵す　森　なほ子
小灰蝶の卵さぞかし小さからむ　篠田　純子
とんでとんで片喰ばかりしじみ蝶　佐藤　竹僊
葉ざくらに蝶はしばらく絡みゐる　佐藤　竹僊

《蝌蚪》

梅雨明けておたまじゃくしやなまずの子　渡辺　京子
この句は一九九九年の調句会で。ウイットの効いた好句。祈念快癒。

蝌蚪の紐孤独の心癒されず　栢森　定男
蝌蚪生れて黒き塊動き出す　栢森　定男
青草に手の泥を拭く蝌蚪の瓶　後藤　志づ
洗面器おたまじゃくしに広すぎる　竹内　弘子
蝌蚪の国手足の出でて乱れけり　後藤　志づ
日溜りの水際真つ黒蝌蚪一族　篠田　純子

たなごころにひつつく蝌蚪の柔肌　篠田　純子
蝌蚪の国次から次へ広がりぬ　早崎　泰江
蝌蚪の池子供の頭おもたかり　竹内　弘子
蛙生る蝌蚪より小さく見えにけり　森　理和
蔦漆後脚出した山の蝌蚪　森　理和
錠替ふる雨滴のごとく蝌蚪出づる　渡邉　友七
恋の句が出来ぬと蝌蚪の水の辺に　田中　藤穂
老人と子供の頭蝌蚪の水　竹内　弘子
朝焼けの消えつつ蝌蚪の紐ふくれ　田中　藤穂
蝌蚪生まる盛り上がりたる池の面　鈴木多枝子
田の水に湧きでるごとし蝌蚪の影　早崎　泰江
長長と蝌蚪の紐置き今朝の池　森　理和
蝌蚪の紐溶けて一尾は遠出せり　森　理和
アメンボの足に喰ひつく蝌蚪のくち　篠田　純子
膕にひっつくスカート蝌蚪の池　篠田　純子
ひと月分の薬分包蝌蚪のひも　篠田　純子
池の面おたまじゃくしの波乱かな　佐藤　恭子
よろこびのきはみのおたまじやくしかな　佐藤　竹僊

《雲雀》

妓生や催合飼ひして支那雲雀　朴　魯植
『ホトトギス』の韓国人の最初の俳人。高島茂さんはたくさんの作品を『獐』に紹介した。

公園を仕切る子のあり揚雲雀　渡邊　京子
揚げ雲雀架け橋さがしさがし啼く　渡辺　友七
初声を仰向きて聴く揚げ雲雀　鎌倉喜久恵
雲雀山舞う十五分走馬燈　松村美智子
雲雀野にボタン落として戯れし　竹内　弘子
雲を恋ふ野雲雀架橋の音曳きて　渡邉　友七
すぐそこに動かず啼かず雲雀ゐし　森　理和
眩しくて雲雀の位置は定まらず　森　理和
雲雀野の朽ちし一橋蝶と往く　渡邉　友七
初雲雀野に隈つくる身の影や　渡邉　友七
ひばり笛空青きまでかなしめり　渡邉　友七
わが饒舌蛙ひばりを凌ぐらし　田中　藤穂
遊水池ひばりの声の充満す　田中　藤穂

金網の米軍基地や揚雲雀　須賀　敏子
雲雀野の中にわが家はあるとおもふ　佐藤　竹僊
雲雀の苑海桐の花の匂ひ立つ　赤座　典子

《猫の恋》

恋猫のはたと鳴きやみ雨かしら　八田木枯

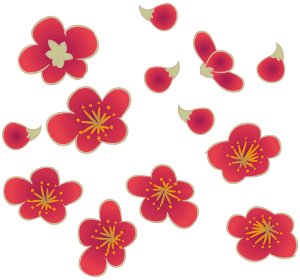
この季語は濃い句が多い。掲句は「雨かしら」が絶品・銘品。七座句会での作品。句集に残されたのだろうか。

恋猫の鼻先なでて指よごす　竹内　弘子
恋猫の一刻静まり闇に消え　芝宮須磨子
泣き声にまどはされたか猫の恋　河合　笑子
掘割も塀もかたぶき猫の恋　竹内　弘子
猫の恋遠くに聞いて今日をはる　須賀　敏子
恋猫の恋の行方や不眠症　芝宮須磨子
恋猫の樹上にひたと夜のくらさ　渡邉　友七
恋猫の水鞠虹と化したまま　佐藤　恭子
部屋毎の柱に凭る猫の恋　赤座　典子
猫の恋破れてオスと仕事する　篠田　大佳
恋猫と仏の飯と茶碗酒　後藤　志づ
踏石のうごきだす庭猫の恋　佐藤　恭子
恋猫に野生の目あり町に会ふ　関口　ゆき
スナックの仕舞屋となる猫の恋　赤座　典子
救急車とまる恋猫身じろがず　佐藤　恭子
センサーライト通り抜けたり猫の恋　早崎　泰江
猫の恋住宅街にけものみち　木村茂登子
恋猫の恋する声の裏返る　鎌倉喜久恵
恋猫に昭和の家は闇深し　鈴木多枝子
蕁麻を踏みしだきゆく猫の恋　竹内　弘子
恋猫に丸く開けおく出入口　芝宮須磨子
子育てに一途となりぬ猫の恋　早崎　泰江
恋猫がそばに寄りそふ小凩かな　佐藤　恭子
ヒマラヤン恋猫となり生臭し　遠藤　実
恋猫に指鉄砲をむけてみる　佐藤　恭子
恋猫に枕とられて夜を明かし　佐藤　恭子
霜柱踏みて早早猫の恋　佐藤　恭子

御来光あふぐ鴉と恋猫と　佐藤　恭子
同じ道通るのはいや猫の恋　堀内　一郎
掘割も塀もかたぶき猫の恋　竹内　弘子
恋猫をあはれともまた憎しとも　木村茂登子
熾烈なる縄張争ひ猫の恋　早崎　泰江
骨立をいとはぬものに猫の恋　佐藤　恭子
胡座の上恋猫いつときの安眠　佐藤　恭子
恋猫の手鞠のやうに眠りこむ　佐藤　恭子
まなこゐの先で恋猫かまへたる　佐藤　恭子
秋方に恋猫のやうなこゑをして　佐藤　恭子
傷負うて恋猫帰る昼餉どき　篠田　純子
恋猫に夫はいはいと答へをり　斉藤　裕子
まさむねが何とこの度恋猫に　斉藤　裕子
偶や恋猫犬を追ひはらふ　佐藤　恭子
恋猫のピー玉追ふてころがりて　佐藤　恭子
恋猫の柳条のもとまろき背　佐藤　恭子
恋猫よまだつづくのかながいのだ　佐藤　恭子
恋猫となれず長生きこたつ猫　森　なほ子

泣き声にまどはされたか猫の恋　河合　笑子
掘割も塀もかたぶき猫の恋　竹内　弘子
猫の恋遠くに聞いて今日をはる　須賀　敏子
大佛をおどろかしたる猫の恋　亀田虎童子
ゐずまひを何度も正す猫の妻　竹内　弘子
片耳の血も瘡蓋に猫の夫　東　亜未
濃厚接触の有無を問はる猫の妻　篠田　純子

（佐藤喜孝・記）



あとがき

今月の表紙

東京・銀座三丁目にある宝珠稲荷神社の地口行灯です。毎年初午の日に奉納され、掲げられています。写真にある「むねにうぐひす」は「梅に鶯」の駄洒落で、地口絵が笑いを誘います。（撮影：不寝）

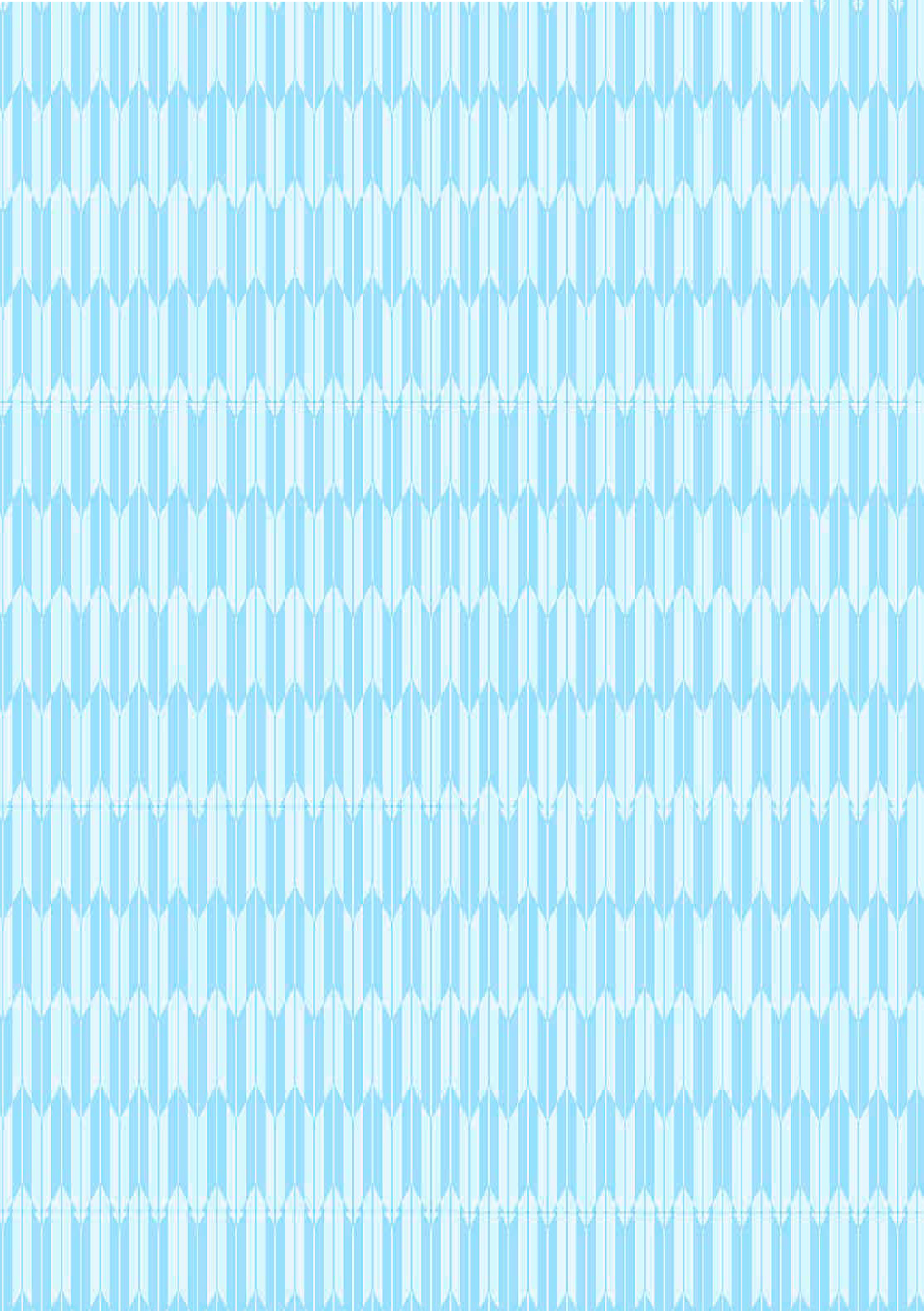
作品欄カット

一九九二年「楼蘭王国と悠久の美女」展で求めた龍村の復元織。山・雲あるいは「生命の樹」といふもののデザインらしい。

選挙

選挙当日は雪の予報。それは大変と期日前投票に。都合よくマイナカードも書き換えをした。書き換えが済み、投票場の五階に行こうとしたら、エレベーターの前には行列ができていた。階段を利用するやう呼びかけてゐる。諦めざるを得ない。帰路、石神井公園池で、早春の風情を楽しんだ。中の島の木立ちの中に鳥がゐる。蓑毛も見える。離れた鳥を狙うには不向きなカメラでもシャッターを切つた。

選挙当日は雪が結構庭に積り投票を諦めた。午後になると思ひがけず雪が止み、日が差してきた。道も乾き始めた。すかさず手袋を探すのも面倒と、自転車に乗つて出かけた。思ひのほか雪で空気が冷たい。指先の痛みがこらえきれずに停車して、ポケットで暖を得た。昔の若い頃の苦労が蘇つた。投票場は二階とは驚いた。入口までたどり着くと車椅子を見つけた。恥も外聞もなく車椅子をお願ひした。

（喜孝）

二〇二六年二月号
発行日　二月十三日
発行所　〒177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2　一階
竹僊房
電　話　090　9828　4244
印刷・製本・レイアウト
カット／福井美佐子・ティリ エイマ
会費　一五〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）